

## 学位請求論文審査の要旨

報告番号 乙 第 号

氏 名 王 慧琴 (Wang Huiqin) 君  
論文題名 中国・遼東半島の地域社会の変容と観光文化の創出  
—旅順周辺の事例を中心に—

審査担当者

主 査	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木 正崇
副 査	慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員 博士 (社会学)	有末 賢
副 査	首都大学東京大学院人文科学研究科教授 社会人類学博士	高桑 史子
学識認定	慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木 正崇

本論文は、中国・遼東半島の旅順周辺の地域社会のうち、主に漁村の変容を通して、政治・経済・社会・文化の全てにおける大きな変化を考察し、改革開放以後の社会主義市場経済の展開の中で、地元と行政の交渉を通じて観光文化が創出されていく過程を現地調査と文献渉猟を通じて考察した。中国に関する文化人類学的研究は少数民族地域を中心に展開し、近年になって徐々に漢族の調査・研究も積み重ねられてきたが、本論文のような中国北部の事例研究は極めて少なく貴重な成果である。論文の構成は以下の通りである。

序章 問題意識と研究視点

### 第Ⅰ部 地域社会の変容

- 第1章 調査地の概観—旅順周辺を中心に
- 第2章 解放後の地域生業の変化—社会主義の変容
- 第3章 改革開放後の地域社会の変容—家族を中心に

### 第Ⅱ部 観光推進における外部からのインパクト

- 第4章 観光推進の拡大と歴史文化の再認識—旅順・大連との連関
- 第5章 郷村観光と文化の創出—外部社会との交流

### 第Ⅲ部 地域社会で創出された観光文化

- 第6章 地域エコツーリズム風情の創出

## 第7章 民間信仰の復興と観光化—媽祖と龍王と観音

## 第8章 観光振興による養殖業の発展—グローバル化への道

## 第9章 地域開発と観光文化の創出—民間と行政のはざままで

本論文は序章で問題意識と問題点を述べ、第Ⅰ部で地域社会の変容を漁村の事例で検討した後に、第Ⅱ部で外部からの観光推進の働きかけが地域社会に与えた影響を考察し、第Ⅲ部では地域社会で新たに創出された観光文化を検討した。地域社会の動態的变化を内部から外部へと時系列を辿って明らかにした。

序章では研究対象を遼東半島の先端部に位置する旅順周辺の地域社会、特に漁村に設定した理由や論文の特徴について述べる。第一は従来中国の漁撈や漁村に関する研究は殆ど南方に限られ、北方の漁村社会に関する研究は皆無の状況であり、本論文は研究の空白を埋めることを意図した。事例として旅順周辺の漁村を取り上げて、生業と社会、民間信仰などの変化を考察し、漁村独自の地域性を明らかにすることを試みている。第二は旅順という特別な場所への注目である。旅順は日清戦争（1894～1895）と日露戦争（1904～1905）で戦場となり、ロシア、日本、中国が激しく拮抗した「震源地」として歴史的に有名で、その後も「満洲国」の建国で約40年近く植民地の歴史が続いた。しかし、旅順の社会主義体制下での変化や現状はほとんど知られていない。旅順は2009年以降に本格的に開放され、植民地の記憶を観光開発に利用して経済活性化の起爆剤にしようと試みている。こうした現状に鑑みて旅順とその周辺の漁村を巻き込んだ総合開発による地域社会の動態的变化を明らかにしようと試みている。

第1章では、旅順とその周辺の地理的概況と歴史的概況をのべる。旅順とその周辺は遼東半島の南端にあつて、天然の良港に恵まれ、漁撈活動が盛んであったが、農業の比重も高いことが指摘される。歴史的にみると、山東省の移民が持ち込んだ内陸の文化と満洲族の文化が融合し独自の風土を形成していた。近代においては軍事拠点とされて、各国の利権が拮抗する植民地支配の舞台となった。概況ではあるが論文の骨子となる視点が明示される。

第2章では、解放後の地域生業の変化と社会主義の変容の過程を検討する。T村という具体的な漁村での動きを中心として、解放初期の漁撈活動の停滞、人民公社時代の集団労働、経済改革開放後の生産請負制度の導入による変化、家族・個人を単位とする漁撈への移行が指摘される。特に2000年代の漁撈資源の減少や漁業への工業化の浸透で「三漁問題」（漁業・漁村・漁民）として格差の拡大が指摘されるなど大きく変化した。旅順周辺における漁村の生業や家庭生活への観察を通して、生業や食生活及び住生活などの変化過程を論じ、特に労働形態の変化に伴う人々の労働意識の変化に注目した。収入は増加したが、村の人々の相互交流が少なくなつて疎遠感が芽生えるなど、地域社会には様々な問題が発生している。

第3章では、女性の社会的地位を究明して、婚姻に関する価値観の変化を指摘し、人民時代と改革開放後の比較によって女性の人生観の変容を通して社会的な背景の特徴を読み取る試みを行っている。結婚式の変化も経済の状況と連動しているので、地域社会の変貌が明らかになる。婚姻変化と家族の変容、漁撈活動の活発化、民間信仰の復活の中に漁村の特質を見つけ出し、地域社会の再構築の可能性についても論じている。

第4章では、漁村を取りまく観光開発に視点を移し、旅順との関連性を論じる。近年、旅順や大連の植民地遺構を「負」の文化遺産として資源化する動きがみられる。近年のポストコロニアル研究の視点を入れて、歴史の「連続性」と「非連続性」を考慮しつつ、植民地遺構と観光の「相互作用」の関係を考察する。旅順においては、悲惨な記憶を呼び起こす戦跡をダークツーリズムとして観光対象に取り込む動きが生まれてきた。旅順は政治情勢と連動しており、「烈士墓」、「万人坑」、「博物館」などを「集合記憶」として、愛国主義教育の教材としての役割を果たしていた。現在はその方針を維持しているものの、地域社会との関連性や観光と連動して文化の資源化へと結合させる過程を論じる。

第5章では、経済の改革開放以後の状況の観光の新たな展開について、郷村観光を中心として論じる。1992年以降中国政府は観光を大がかりに推進するために、毎年特定のテーマを定めて、大規模な観光プロモーションを行うことになった。旅順周辺の漁村地域にはその中の一つであったルーラルツーリズム、「郷村観光」（中国語：郷村旅游）という新しい形態が導入された。「郷村」とは田舎や村里の総称で、その概念と種類・形態について論じる。現地での滞在を重視し地元と交流する「郷村観光」は、「三農問題」や「三漁問題」の解決に寄与するのみならず、地域社会の自然環境や暮らしぶりを維持する手段として活用する動きである。「漁家楽」と呼ばれるように、家に滞在して接待を受け暮らしを学び体験する仕組みも導入された。「郷村観光」をめぐる外部と内部の関係や、文化の創出過程が検討される。郷村観光に地域社会から熱い視線が注がれるようになった理由は、農村産業構造の調整期に伴う供給側の需要と、都市化の急成長による市場側の需要があると考え、漁村では、「郷村観光」を通して外部社会との交流や連携を強めて、地域の歴史や風土に培われた特色のある伝統文化を発見・創出し、再構築する試みがなされているという。

第6章では近年、中国で積極的に推進されているエコツーリズムの創出を旅順周辺の桜花園や自然保護区、温泉とからめて論じ、「郷村観光」との連携構築の過程を行政と在地の双方から論じる。観光開発にあたっては、行政の効果的な政策だけでなく現地の人々との地縁による人間関係の協力も大きいという。農山漁村ツーリズムの構築にあたって、観光商品が如何にして生まれ、地域住民が観光商品の開発にどのように関わってきたのかを「在地の側」からの実践

的な事例によって研究している。特に漁村地域の観光振興の実態を考察し、2009年以後、旅順とその周辺地域の観光が大きく性格を変えて、古戦場見学などに偏っていた従来の集客姿勢を転換した。旅順と周辺の観光ではエコツーリズムを導入して、ダークツーリズムを補完させ、観光が漁村社会に新たな社会的、経済的効果をもたらす可能性を論じている。

第7章では、漁村地域で漁民から親しみをもってきた漁撈信仰や民間信仰の変化を媽祖と龍王と観音を事例として論じ、独自の漁村文化の変容を考察した。中国では宗教文化を観光化する動きが顕著で、意識的に復興して観光資源にすることを目的として民間信仰の復興を企てることが多い。特に聖地観光は信仰と娯楽の両方の目的を持つツーリストを呼び寄せる手段とされる。この現象は宗教ツーリズムと呼ばれ、「真正性」authenticityが重要な概念となり、地元とツーリストがそれぞれ「真正性」と微妙にずれを起こしながら観光文化として展開している。本研究では民間信仰の復興と、地域文化としての表象について論じ、観光資源としての持続的利用の可能性を論じた。民間信仰や伝統文化は観光商品の創出にとって重要な意味を与えられていく過程が明確化された。

第8章では、観光で重要位置を占める「土産品」について、特に地域の「特産品」が「土産品」として演出されていく過程を検討した。旅順周辺の特産品はナマコであり、遼東半島のナマコ食文化の歴史を踏まえて、現代のナマコ食文化の多様性、ブランド化されたナマコの位置づけなどを考察した。現在では伝統的な食文化としてのナマコが、大連・旅順地域のブランド（銘柄）として確固たる地位を確立し、文化指標となっていることを明らかにしている。ナマコの利用法や意味付けは、もてなし、贈答品、儀礼の供物、健康増進、観光客の土産物、高級ブランドなど多様性に富み、観光振興の中で重要な役割を果たすことが期待されている。現在ではナマコが地域文化を象徴する食べ物となった。かくして漁撈にまつわる伝統文化は、旅順周辺地域のイメージ造りに活用され、地域の「個性」の創出に際して重要な役割を担っている。

第9章では、本論文の基調である観光開発における民間と行政との関わりについて総合的に論じている。経済改革開放後、中国政府は観光を「国策」として位置付け、1992年から毎年観光テーマを定め、観光プロモーションを媒介として政府の観光政策を積極的に宣伝することを政策として開始した。つまり中国の観光推進における政府の主導的な役割は、国の観光業の発展にとって欠かせない促進力である。地域観光の推進では、地域政府や地元の人々が観光開発の担い手として重要な役割を果たしている。観光振興は確かに地域社会に様々な恩恵をもたらし、観光産業の展開を通しての経済発展は、地域政府が「績効」（成果）をアピールするよい機会でもあった。しかし、観光推進によって文化の変容と再構築が進み、「文化」概念が読み替えられていく状況があることを指

摘している。観光推進により伝統文化が新たに発見され展開する過程の中で「文化」の概念自体が大きく変容していくのである。中国における観光文化の創出は「ホストとゲストの間に存在する力関係の不均衡」だけでなく、それぞれの相互をつなぐ人々の役割、特に中国における行政の圧倒的な力と、ささやかに対抗する民衆のあり方という現実に向け多声的語りの重視を提案する。

本論文の評価は以下の通りである。

第一は遼東半島の旅順とその周辺の地域社会の変容を、経済と社会の変動を基盤に据えながら、様々な角度から分析を入れ、漁村と都市の双方を視野において考察した点である。

第二はフィールドワークが難しい中国で、特定の地域社会、特に北部の漁村を聞き書きや参与観察で調査し、解放、文化大革命、改革開放、観光化と続く劇的な変化を追いかけた研究はほとんどなく、モノグラフとして評価できる。

第三は旅順の新たな観光開発が2009年以降に始まって以来、影響が周辺の漁村に及び、1992年以来の政府指導の観光開発の中核の理念であったルーラルツーリズムやエコツーリズムに、ダークツーリズムが加わって再編成される興味深い事例であり、観光人類学の新しい分野に挑戦していると評価できる。

第四はダークツーリズムという新しい概念を導入し、「植民地遺構」や「負の記憶遺産」を観光化に利用する過程が描かれていて、地域社会の変動を新しい観点からとらえようとする野心的試みとして評価できる。戦争と植民地の歴史記憶についての資源化は重い課題として残り続ける可能性がある。

第五は中国の行政主導の観光開発が、社会主義的近代化のもとで、「文化」の客体化・資源化・商品化を促進し、「文化」の発見や創出を促すだけでなく、「文化」概念を新たなものに再構築していく方向性が示唆され、今後の研究の深まりが期待できる。新たな「観光文化」の創出は、伝統と革新のせめぎあいの実験場として今後も研究の大きな課題となると思われる。

一方、いくつかの問題点も指摘できる。

第一は漁村の変化に関する考察を全面的に押し出すのが当初の計画であつが、農村とは異なる漁村の地域社会としての独自性を十分に論じきるまでには至っていない。社会主義体制下の調査の限界や急激な社会変化の影響もあろうが、夫婦・親子・家族、後継ぎ問題など社会構造についての深い調査が望まれる。

第二は観光研究に関しては、旅順という植民地の記憶が残る地域を選択したので、新しい視野が開けたが、行政指導が強いためか、植民地の記憶のためか、現地の人々の生の声が反映されていないことが残念である。また、観光客の視線や多様な声をもう少し生かすべきであった。観光客の多様な立場に基づく意見を取り込めば、地元との相互作用の動態的变化を深い次元で把握できる。

第三は論文の構成はよくできているが、全体を有機的に連結させていく工夫

が必要である。漁村の社会史、農村と都市の関係性、政府主導の観光開発、観光客の声などを繋いでいく分析概念の使用や体系化はまだ十分とは言えない。

第四は旅順・大連の観光開発は、明らかに日本人のツアー客を当て込んで展開しており、日本企業の資本も投下されている。書きにくい主題だが、日本人観光客の実態について触れていけば、植民地時代の集合記憶の相違や、グローバル化の中の東アジアの観光開発という広い視野に立つ研究も可能であった。ナマコ研究もより広域での展開が可能であったとみられる。

第五は旅順・大連のツーリズムは、日本と中国の政治と外交の関係によって大きな影響を被る。ダークツーリズムについてはユダヤ人を巡る「和解」や平和構築のような国際的合意を得るまでには至っていない。歴史認識を巡る齟齬が解消されていない東アジアでの今後の展開は現状では何とも言えない。

第六は植民地の記憶に敏感な土地として独自のホット・スポットとなる可能性を秘めており、本論文では敢えて主題化を避けているが、政治や宗教と絡めて論じる必要も出てくるであろう。これは将来の課題である。

いずれにせよ、論文自体は優れた内容であり、日本語での記述や表現も巧みである。移動と移住が常態となり、観光化が展開して今後ますます交流が拡大すると予想される東アジア地域で、本論文のような主題はさらに深く丹念に研究する必要があり今後の展開が期待できる。以上のような観点から、審査担当者一同は、王慧琴君が提出した本博士学位請求論文は、博士（社会学）を授けるに十分にふさわしい内容であると判断する。